歴史館だより　No.102　　２０１１年２月発行

「親鸞聖人像」願入寺蔵

「芦雁図」当館寄託　茨城県指定文化財

「西山荘」（「桃源遺事」所収）当館蔵

目　次

① 展示紹介　特別展　「頼重と光圀－高松と水戸を結ぶ兄弟の絆－」
② 所蔵資料紹介　「常盤炭田関係資料」
③ トピックス
　〇平成２１年度　特別展「親鸞－茨城滞在２０年の軌跡－」
　〇平成２２年度　特別展「立原杏所とその師友」
　〇教育普及事業・歴史館いちょうまつり

展示紹介

特別展　頼重と光圀

―高松と水戸を結ぶ兄弟の絆―

平成23年2月5日（土）～3月21日（月）

今年は，水戸藩２代藩主徳川光圀が藩主に就任して３５０年目にあたります。光圀は「水戸黄門」として広く知られていますが，自ら中心となって『大日本史』編さんを始めました。この事業は，わが国の歴史学史に大きな足跡を残したのみならず，幕末に大きな影響を与えた「水戸学」を生み出しました。

自由奔放な少年時代を過ごしていた光圀が学問に目覚めたのは，司馬遷の『史記』伯夷伝を読んだことでした。伯夷（はくい）と叔斉（しゅくせい）の兄弟愛を描いたこの物語は，兄をさしおいて藩主を継ぐことになっていた光圀に大きな感動を与えたのです。

そして光圀は藩主に就任するにあたり，つぎの藩主は高松藩主である兄松平頼重の長男に継がせることを明らかにします。兄こそが水戸藩主を継ぐべきであった，という思いを次の世代で実現させることになります。

一方，頼重は家光によって下館５万石の大名に取り立てられ，のちに讃岐高松１２万石に移されます。そして父頼房，弟光圀からは，水戸徳川家伝来の宝物がいくつか贈られました。

この高松松平家は，会津松平家，彦根井伊家とともに歴代当主が江戸城内溜間（たまりのま）に詰め，将軍の政務の諮問に応じるという重要な役割を担うことになります。

本展示では，こうした頼重と光圀をめぐる人びとやゆかりの品を通して，兄弟の生涯を紹介していきます。展示の構成はつぎのとおりです。

序章　高松松平家の名宝

徳川頼房，光圀から頼重に贈られた名宝を紹介します。

第１章　兄弟の周辺

頼重、光圀兄弟に関わる人びとと時代背景を紹介します。

１．兄弟の系譜　２．頼重，光圀の兄弟姉妹　３．将軍家光と頼房　４．寛永という時代

第２章　兄をさしおいて

光圀が水戸藩の跡継ぎとなったいきさつと歴史書『史記』との出会いを紹介します。

１．世子決定　２．伯夷と叔斉

第３章　高松藩主松平頼重

高松藩主となった頼重と高松の地理的重要性，高松藩の地位を紹介します。

１．大名取立　２．高松へ　３．頼重の人物像　４．高松松平家の家格と役割

第４章　水戸藩主徳川光圀

水戸藩主を継いだ光圀について，『大日本史』編さんなどの事績と人柄をあらわす書状を紹介します。

１．『大日本史』編さん　２．綱吉と光圀　３．光圀の人物像　４．引退

終章　綱條と頼常

頼重の子で水戸藩を継いだ綱條（つなえだ），光圀の子で高松藩を継いだ頼常（よりつね）について紹介します。

１．頼重の子・綱條　２．光圀の子・頼常

●おもな見所

１．国宝をはじめとする貴重な文化財を公開します。

●国指定

国　　宝	藤原佐理筆詩懐紙（平安時代）	香川県立ミュージアム（３月のみ）
重要文化財	法華経（平安時代）	香川県立ミュージアム（３月のみ）
重要文化財	花園天皇宸翰御消息（南北朝時代）	香川県立ミュージアム（２月のみ）
重要文化財	光厳天皇宸翰御奉納心経（南北朝時代）	香川県立ミュージアム（２月のみ）
重要美術品	後陽成天皇宸翰（桃山時代）	香川県立ミュージアム（３月のみ）
重要美術品	後水尾天皇御加筆（江戸時代）	香川県立ミュージアム（２月のみ）
重要文化財	太刀　銘則包（鎌倉時代）	水戸東照宮
重要文化財	名古屋城御湯殿書院上段之間天井板絵	名古屋城総合事務所（２月牡丹・３月瓜花）

●県指定

香川県	高松城下図屏風	香川県立ミュージアム（３月のみ）
茨城県	総毛引糸威具足（伝・徳川家康所用）	水戸東照宮
茨城県	太刀　銘吉房　附糸巻太刀拵	水戸東照宮
茨城県	日乗日記	本山久昌寺

●市指定

高松市	松平頼重領知目録	香川県立ミュージアム（３月のみ）
高松市	領知宛行状案	香川県立ミュージアム
水戸市	東照宮銅釣燈篭	水戸東照宮
水戸市	狩野興也「旭日に波図」	水戸市立博物館
水戸市	左近詠草	個人

２．新しく発見された資料を初公開します。

・水戸城三階櫓棟札写　・西山御山家絵図（西山荘が建設された時の図面）

国宝　藤原佐理詩懐紙（平安時代）
香川県立ミュージアム蔵
「三蹟」で知られた和様書道の名手の書。

徳川光圀面容　本山久昌寺蔵
光圀が細工師に彫らせた自分の顔。

期間中の主な展示関連行事（行事は全て要入館券）

講演会　「徳川光圀の人間像」　講師　鈴木　暎一　氏（常磐大学教授）
２月27日（日曜日）午後2時～4時

ミニ講座　各日とも午後2～3時　担当　永井　博（当館学芸課長）
２月12日（土曜日）「兄弟同様の間柄－頼房と家光－」
19日（土曜日）「出生の秘密－頼重と光圀－」
３月 5日（土曜日）「頼重、高松へ」
12日（土曜日）「高松松平家の役割」

展示解説　各日とも午前11時～、午後2時～　担当　永井　博（当館学芸課長）
２月 6日（日曜日）、13日（日曜日）、20日（日曜日）
３月 6日（日曜日）、13日（日曜日）、20日（日曜日）

期間中のその他の行事（参加無料：開館時から整理券を配布します）

こども歴史教室　「水戸黄門ってどんな人？」
２月11日（金曜日）午前11時～、午後１時～，午後３時～
定員：各回50名（小学生向け：親子での参加をお待ちしています）

マッチ棒のお雛様づくり
２月20日（日曜日）午後１時30分～
定員：先着20名

十二単試着体験
２月26日（土曜日）午後１時30分～
定員：先着20名（身長150cm以上の女性の方）

所蔵資料紹介

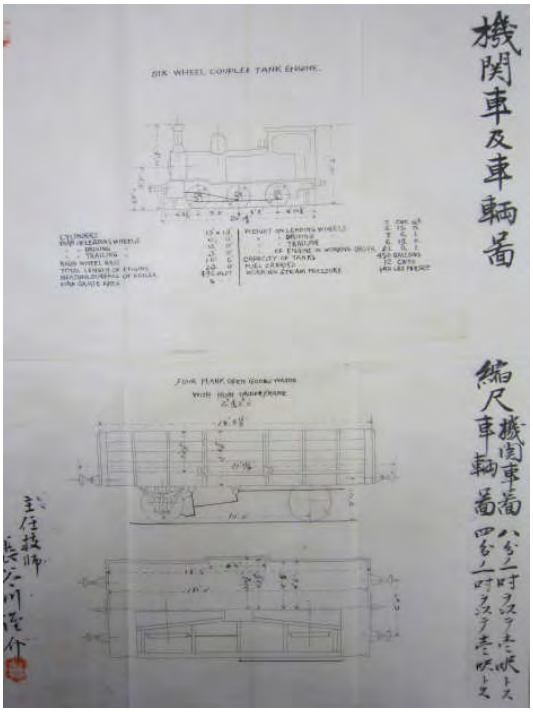
「常磐炭田関係資料」

常磐炭田は，北は福島県双葉郡から南は茨城県日立市にまたがる炭田でしたが，その常磐炭田に関連する当館で所蔵している資料をいくつか紹介します。

明治30年に水戸平間の日本鉄道磐城線(現在のJR常磐線)が開通すると，それより前に開通していた土浦線・隅田川線と併せて東京地区への連絡が容易になりました。磐城線建設は，その地理的位置から東京地区への石炭供給地として常磐炭田に着目されたためです。磐城線が開通すると各炭鉱会社は，炭坑口から停車場まで石炭を運搬する砿業用鉄道敷設を出願して許可されています。行政文書「明治29年10月～明治33年各鉄道敷設願関係書類」には，北中郷村地内砿業鉄道(現北茨城市)や茨城炭砿砿業用馬車鉄道(現北茨城市)，秋山炭砿石炭運搬用鉄道(現高萩市)，手綱炭砿石炭運搬用鉄道(現高萩市)などの石炭運搬用鉄道敷設許可関係文書が綴られており，工事方法書や予算書，図面(写真１)，命令書が添付されおります。これらの資料から鉄道敷設の申請許可の経過，状況を窺い知ることができます。この砿業用鉄道の敷設により，以前は人力・馬力運搬，海上輸送に頼っていたものが，鉄道に切り替わり，石炭が安全かつ大量に運ばれるようになりました。

写真１　北中郷村地内砿業鉄道敷設許可願に添付されている「大塚炭砿線路工事方法書出願に要する図面」より

大塚炭砿鉄道線路平面図



機関車及車輛図

戦後の常磐炭田の様子が伺える資料として常磐炭砿株式会社茨城砿業所が刊行した所内誌「茨城砿業所タイムス」があります。常磐炭砿株式会社は，映画「フラガール」で話題になったスパリゾートハワイアンズ(旧常磐ハワイアンセンター)を経営している常磐興産株式会社の前身です。茨城砿業所は北茨城市の神ノ山砿・中郷砿を中心に石炭採掘をしていて，戦後の石炭産業の発展に大きく関わっていました。

茨城砿業所は昭和20年5月1日に設置されますが，タイムスは昭和25年3月発刊で，当館では創刊号から昭和46年までを所蔵しています。記事の内容は会社の運営，機械の導入(写真２)，労働者生活・娯楽に関するものも多く含まれています。戦後の常磐地域の石炭産業全般を知る上で有用な資料です。

戦後の石炭産業は，石炭や鉄の生産を優先した傾斜生産方式，朝鮮戦争による特需景気，昭和30年代の高度経済成長により大きく発展していましたが，石炭から石油へ転換するエネルギー革命などによって状況が変わり閉山が相次ぎます。

そのような中，茨城砿業所は昭和43年に出炭量100万トンを越えて，過去最高を記録するなど活況を呈していましたが(写真３)，昭和46年に出炭量増加を期待されていた中郷砿の新坑(写真４)が開削間もなく出水事故にあい，閉山を余儀なくされ，それより先に坑内条件悪化のため神ノ山砿も閉山しており，常磐炭田は終息を迎えることになります。

行政文書「産炭地域振興関係綴」「昭和46年度～昭和47年度茨城県石炭鉱業閉山対策係綴」「昭和46年常磐炭砿茨城砿業所閉山関綴」には，国や県の石炭危機打開案，閉山対策がみられ，閉山後の地域経済の崩壊を防ぐためにさまざまな対応をしているのがわかります。特に，工業団地造成など地元の積極的な工業振興開発施策により，石炭産業に変わる新しい工業都市への転換が進められていきました。

茨城砿業所タイムス

保安上の予備的装置

写真２　設備拡充を伝える記事(昭和45年10月1日付)

茨城砿業所タイムス

４３年度出炭実績
1,039,000トン

年間最高出炭達成に実現

写真３　出炭量100万トンの記事(昭和44年4月1日付)

茨城砿業所タイムス

伸びゆく南部の宝庫

一坑口年間１００万トンの出炭実現

神の山の精鋭が応援

写真４　中郷砿新坑開削の記事(昭和46年7月21日付)

トピックス

平成21年度　特別展
「親鸞　－茨城滞在２０年の軌跡－　」を開催しました

鎌倉時代，浄土真宗を開いた親鸞は，９０年の生涯のうち約２０年を茨城で過ごしました。親鸞の生涯と思想，親鸞を支えた家族と社会，そして親鸞が京都に赴いた後も師の教えを受け継いだ弟子（同朋）たちの動向という３つの観点から，茨城における親鸞の軌跡をたどり，滞在２０年の意義を探りました。

また，江戸時代のはじめまで常総市にあった親鸞直筆の「坂東本教行信証（ばんどうぼんきょうぎょうしんしょう）」（国宝）が400年ぶりに茨城に里帰りしました。さらに，日本一美しいと言われる国の重要文化財「木造彩色聖徳太子立像（もくぞうさいしきしょうとくたいしりつぞう）」など浄土真宗の至宝も公開しました。

群馬県から来館した方は，「親鸞さんが好きで，いろいろな場所を巡っています。この展示を楽しみにきました」と言っていました。また，歴史が好きで来館したという小学６年生の女子児童は，熱心にメモを取りながら見学していました。

１　開催の趣旨

鎌倉時代は鎌倉仏教とよばれる，個人の救済を説く新しい仏教が起った時代であり，その祖師のひとりが浄土真宗を開いた親鸞です。親鸞は９０年の生涯のうち，壮年期の約２０年間を茨城ですごし，ここを拠点に布教を進めました。それは茨城の自然と風土のなかに身を置き，そこに生きる人びと語り合い，親交を深める日々でもありました。そうした日々の積み重ねは，親鸞自身の思想の形成にも少なからぬ影響を与えていると思われます。実際，親鸞の思想の具現であり，浄土真宗の根本聖典ともいえる『教行信証』の草稿を茨城で著しています。

本展では，親鸞の生涯と思想，親鸞を支えた家族と社会，そして親鸞が京都に赴いた後も、師の教えを受け継いだ弟子（同朋）たちの動向という，３つの視点から茨城における親鸞の軌跡を辿ることで、滞在２０年の意義を探るものです。

２　主　催

茨城県立歴史館

３　協　賛

株式会社　常陽銀行

茨城県信用組合

４　後　援

真宗大谷派，浄土真宗本願寺派，真宗高田派，原始真宗大本山願入寺，

浄土真宗別格本山西念寺，日本放送協会水戸放送局，東日本旅客鉄道株式会社水戸支社，

水戸市，社団法人水戸観光協会，社団法人茨城県観光物産協会，

大好き いばらき 県民会議

５　会　期

平成２２年２月６日(土)～３月２２日(月)

開催日数　４３日　休館日：２月８日（月），２月１５日（月）

6　主な出陳資料及び借用先　　出陳予定資料点数　　約１５０点

国宝　教行信証（坂東本）	京都市・真宗大谷派(東本願寺)
重文　善性本親鸞聖人消息集	三重県・専修寺
重文　拾遺古徳伝絵	鉾田市・無量寿寺
重文　聖徳太子絵伝	那珂市・上宮寺
恵信尼公画像　（初公開）	笠間市・西念寺
茨城県指定文化財　親鸞聖人画像	大洗町・願入寺

7　会期中の関連行事

(1) 講演会「茨城の親鸞」

２月２８日(日)　午後１時３０分から　２時間程度

講師　今井　雅晴氏　(筑波大学名誉教授・真宗文化センター所長)

(2) 親鸞歴史講座

２月１３日(土)「親鸞の生涯～歴史と伝承のなかで～」

２月２０日(土)「茨城の門徒１～県北・県央・鹿行地域～」

３月　６日(土)「茨城の門徒２～県南・県西地域～」

３月１３日(土)「親鸞以後の茨城の浄土真宗」

担当　飛田　英世（当館学芸課首席研究員）

※各日とも，午後１時３０分から　１時間程度

(3) 展示解説

２月１４日(日)

３月　７日(日)

３月１４日(日)

担当　飛田　英世（当館学芸課首席研究員）

※各日のとも，午前１１時・午後２時の２回　３０分程度実施

8　内容

プロローグ

親鸞と親鸞をめぐる家族と茨城の社会

(1) 親鸞の生涯と思想

生涯と思想

師，法然

阿弥陀と太子

(2) 親鸞と社会・家族

親鸞，茨城に来る－大高山・下妻時代－

親鸞の生活基盤－稲田郷と小鶴荘－

親鸞と子，孫

(3) 二十四輩と門徒

面授の弟子，二十四輩

親鸞と修験

武蔵と下野境の門徒
奥郡の門徒
鹿島の門徒
霞ヶ浦の門徒
辛島の門徒
横曽根の門徒

▲ テープカットの様子

▲ 展覧会の様子（木造彩色聖徳太子立像）

トピックス

平成22年度特別展「立原杏所とその師友」を開催しました

江戸時代の後期、関東の南画は江戸を中心に独自の発展をしましたが、水戸藩士の立原杏所（ 1785 ～ 1840 ）もその一翼を担った一人です。立原杏所の作品を中心に、彼と関わりをもった林十江（はやし じっこう）、谷文晁（たに ぶんちょう）、渡辺崋山（わたなべ かざん）らの作品や史資料を交えて、水戸と関東の南画の世界を紹介しました。鴛鴦（おしどり）をはじめとする鳥や草花、袋田の滝、筑波山、富士山といった茨城県内外の景色など、様々な題材の絵を味わうとともに、作者の筆づかいや色づかいなども堪能できます。

来館者からは「立原杏所や谷文晁の作品を楽しみに見に来ました。藍を使った作品が気に入りました」という感想もありました。

1　開催の趣旨

江戸時代も半ばを過ぎた18世紀の後半，上方で盛んとなった南画が関東にも広まりました。江戸はその一大拠点でしたが，水戸藩士の立原杏所（たちはら・きょうしょ）も関東南画壇の一翼を担った一人です。

彰考館総裁立原翠軒（たちはら・すいけん)）の子として水戸に生まれた杏所は，父の元に出入りしていた林十江（はやし・じっこう）や，下野黒羽の小泉斐（こいずみ・あやる）らに画を習い，やがて十江とともに「水戸の南画」を代表する画家へと成長しました。杏所は20代の末に江戸・小石川の水戸藩邸勤務となり，この地で他の南画家や文人と交流をするようになります。藩主の信任も厚く，武士としての忠勤に励みつつ学画に精進し，一家を成しました。また，書や篆刻，鑑識などにも優れ，いわゆる「文人」の一人としても活躍をしました。

本展では，杏所の生涯にかかわった人々の資料を交えつつ，没後170年にあたる平成22年に「南画家」そして武士の「文人」立原杏所の世界を作品と史資料で紹介します。

3　主　　催　　茨城県立歴史館

4　協　　賛　　株式会社常陽銀行，茨城県信用組合

5　後　　援　　NHK水戸放送局，JR東日本水戸支社，水戸市，(社)水戸観光協会，
(一社)茨城県観光物産協会，大好き いばらき 県民会議

6　会　　期　　平成22年10月9日（土）～11月23日（火）
開催日数　40日
休 館 日　月曜日(祝日の場合はその翌日)，11/22(月)は臨時開館

7　関連行事

(1) 講演会

平成22年10月24日(日)　午後1時30分から

講師　小川　知二　氏　(美術史家　元東京学芸大学教授)

(2) 展示解説とミニ講座

平成22年10月23日(土)，10月31日(日)，11月7日(日)

いずれも，1日2回，午前11時から，午後2時から　(各60分程度)

8　展示内容

第1部　翠軒，十江そして杏所へ

(1) 父立原翠軒

(2) 最初の師林十江

(3) 下野黒羽の小泉斐

第2部　謹厳なる文人杏所の世界

(1) 漢画・古画より学ぶ世界

(2) 真景と肖像・人物

(3) 山水の妙，花鳥の彩り

第3部　文晁と門下四哲とその交流

(1) 江戸の巨人谷文晁

(2) 心の友渡辺崋山

(3) 山水花鳥の名手　椿椿山と高久靄厓

(4) 継承者　春汀と朴二郎

重要文化財の「葡萄図」(右端・東京国立博物館蔵)

重要美術品「芦石鴛鴦図」（出光美術館蔵）

「歴史館いちょうまつりー『和の文化』の祭典ー」を開催しました

平成22年11月3日（水曜日）から11月23日（火曜日・祝日）まで「歴史館いちょうまつりー『和の文化』の祭典ー」を開催しました。

このイベントは，歴史館の展示とともに、庭園に広がる樹木の色づきや約150mに及ぶ「いちょう並木」の黄葉に触れつつ，「和の文化」にも触れていただくことを目的として，毎年11月に開催しているものです。

3日（水曜日）は親子考古学体験講座を行い，土器や石器の実物に触れたり，瓦の拓本を取ったりして，考古学のおもしろさを体感しました。

13日（土曜日）の県民の日には，映画「桜田門外ノ変」のロケ地にもなった旧茂木家住宅の民家解説や，琴や尺八の邦楽演奏会，茶席などが行われ，多くの人で賑わいました。

また，14日（日曜日）には，三遊亭金時氏ら3人の落語家による落語会「落語からのぞき見る江戸の町」が行われ，参加者は江戸時代へタイムスリップしたようなひとときを過ごしました。

その他，NPO法人による「昔あそび」やハクビ京都きもの学院による「十二単着装」などのイベントも行われ，多くの方に歴史館に親しんでいただきました。

▲ 旧茂木家住宅の民家解説写真

▲ 三遊亭金時氏の講座・落語会

茨城大学地域連携講座を開催しました

平成22年10月3日（日曜日），県立歴史館では，茨城大学との地域連携講座を行いました。
この講座は，茨城大学人文学部の先生方が最新の歴史研究の成果を一般県民に紹介することを目的としており，今年度初めて実施しました。

第1回目となったこの日は，日本古代中世史が専門の高橋修教授が「平将門の乱」をテーマに講座を行いました。平安時代の関東地方の地域的特性や東北地方との関連など，幅広い視点で「平将門の乱」をとらえた話に，参加した約90名の方々は熱心に聞き入っていました。

参加者からは「猿島郡で将門の乱が起きた意味合いや奥州との関連を知る機会となりました」という感想も聞かれました。

▲ 高橋教授の話を聞く参加者の様子

平成22年度に実施した茨城大学地域連携講座の日程及びテーマ演題は，次のとおりです。

10月 3日「再考　平将門の乱」(高橋修教授：日本古代中世史)
10月16日「近世中後期の藩政改革と水戸藩」(磯田道史准教授：日本近世史)
11月 6日「〈新しい学説〉が生まれる時－中国考古学を題材に－」(鈴木敦教授 ：中国古代史)
11月20日「漢字のご先祖　甲骨文字を〈解読〉する」(鈴木敦教授：中国古代史)
11月27日「清朝の歴史から見た現代中国」(澁谷浩一教授：アジア・中央ユーラシア史)

県立歴史館で「歴史館探検ツアー」を行いました

平成２２年１２月１９日（日曜日），小学生向け行事として「歴史館探検ツアー」を行いました。 今回のツアーのテーマは「ぬくもり」です。

参加した３２名の小学生は，歴史館についての説明を受けた後，民俗収蔵庫で火鉢や「あんか」，陶器でできた「ゆたんぽ」など，ちょっと昔の暖房器具を見たり，機械室で館内の温度を調整している様子を見学しました。

そして最後に「弓ぎり」という方法での火起こし体験を行いました。

子どもたちからは，「普段入れない場所が見られて勉強になりました」「火起こしは難しかったけれど楽しかった」「昔のいろいろな道具が見られておもしろかった」などの感想が聞かれました。

▲ 弓ぎりによる火起こし体験

▲ 民俗収蔵庫で説明を聞く子どもたち

「鹿角（ろっかく）ペンダントづくり」を開催

平成２３年１月８日（土曜日），テーマ展「見て ふれて 楽しい考古学－2010茨城県教育財団調査遺跡紹介展－」関連イベントとして「鹿角（ろっかく）ペンダントづくり」を実施しました。

古代の人々が首から下げていた「鹿角ペンダント」。参加者は鹿島神宮から寄贈された本物の鹿の角を削って，自分だけのペンダントを作りました。はじめに，鹿の角を目の粗い紙ヤスリで削り，角（かど）を取ります。 その後，目の細かい紙ヤスリ等で滑らかにしてから，ガラス玉とひもを通して完成です。

参加者からは，「角を削るのがたいへんだったけれど，きれいにできてよかった」「自分だけのペンダントができたのでうれしいです」などの声が聞かれました。

▲ 親子揃ってペンダントづくり

▲ きれいにできました

歴史館では親子体験型イベントを実施しています。

「ミニ掛け軸づくり」

参加者は「掛け軸って自分で作れるの？」と興味津々です。材料は紙とのりとはさみ，そして「書」「絵画」を書くためのペンや色鉛筆などです。皆さんも掛け軸を見たことがあると思いますが，「書」や「絵画」の周りにきれいな布などで飾りがついています。そういった「書」や「絵画」を飾っているものを総称して「表装」といいます。参加者は，その表装も作りました。

ミニ掛け軸ができあがると子どもたちからは「お友達の誕生日が近いからプレゼントにしよう」「自分の部屋に飾ろう」といった声が聞かれました。子どもといっしょに参加したお父さんお母さんからは「子どもより大人の方が夢中になりますね」といった感想がありました。

なお，今回作った「ミニ掛け軸」のセットは歴史館の売店で購入できます。

写真下左　お母さんの掛け軸が気になります

写真下右　親子で作る微笑ましい光景が見られました

歴史館ボランティアが活躍

今回のイベントをはじめさまざまな催しの際に活躍しているのが「歴史館ボランティア」で，スタッフとしてイベント事業などをサポートしています。歴史に興味があり歴史館の事業に理解のある方でしたら，どなたでも参加できるそうです。この日は大学生なども含めて 3 人のボランティアの方が活躍し，参加者に掛け軸の作り方をアドバイスしていました。

写真下左　歴史館ボランティアの方がアドバイスします

写真下右　親子でそれぞれ作りました

展覧会はもちろん体験型イベントもたくさん開催しています

県立歴史館では，歴史博物館と文書館の機能をあわせもつ施設として，茨城県の歴史に関する資料や公文書を収集・保存して，多くの方々にご利用いただいております。

広い敷地(約 72,000 ㎡)のなかには，本館のほかに，移築された江戸時代の民家建築や明治時代の洋風校舎などがあります。また樹木や草花にも恵まれ，季節によってさまざまな美しい装いを見せてくれます。

また，展覧会をはじめ，歴史に興味を持つきっかけづくりとして，さまざまな体験型のイベントを開催しています。ぜひご参加ください。

主な体験型イベント

よろい・かぶと体験

十二単衣試着体験

マッチ棒のお雛様づくり

勾玉づくり

紋切り遊び

「十二単（じゅうにひとえ）試着体験」を開催

平成２３年１月３日（月曜日），新春イベント「十二単（じゅうにひとえ）試着体験」を実施しました。

はじめに，ハクビ京都きもの学院のご協力により，本物の十二単の着装が披露され，その後，試着体験となりました。

体験用の十二単は，襟の部分が重ねて作られた略式のものですが，重さは約５kgあります。

県内各地から参加した２０名の女性は，ハクビ京都きもの学院の方々に着装をしてもらうと，嬉しそうな表情で思い思いのポーズをとり，記念撮影をしていました。

試着した方からは「お正月に十二単を着るのを楽しみにしていました」「重さも感じますが，気持ちが引き締まります」「ぜひ，次の機会も着たいと思います」などの声が聞かれました。

▲ 十二単着装の様子

▲ 親子そろって“平安美人”